大正期の服装改善運動における考案服の特質

—尾崎芳太郎著『是からの裁縫』における「経済服」の再現（二）—

夫馬佳代子・遠藤　綾子

一、はじめに

本研究は、大正期の服装改善運動の推進者であった尾崎芳太郎が執筆した『経済改善　是からの裁縫』前篇・後篇に記載される考案服を書籍に掲載される製作手順に基づき再現を試み、和服から洋服への転換期に如何なる発想で新たな時代に適応する近代衣服を生み出そうとしたかを、実証的に検証することを目的としたものである。

第一報では、経済服「一反で八尺あまる本裁　二尺幅物　基準裁」の再現過程及び着装による検討を行い、従来の単衣長着の五分の四の用布で製作できることを実証した。このことは、大正期の緊急課題であった物資不足、特に衣料不足への対応としては一定の評価ができる一方で、着装の外観からは、襟元が開く等の着装上の課題も見られた。

本報告では、前報の継続として、尾崎芳太郎が考案した経済服「三分の二で出来る四ツ身と三ツ身（四ツ身）」について、前報と同様の手法で再現を試み、尾崎の考案する経済服の特徴、つまり日本の和服の用布の節約、さらに和服から日本独自服への転換についての発想の一端を明らかにしたので報告する。

なお、服装改善運動の背景及び尾崎芳太郎の服装改善に対する考え方については、第一報に記したので、本報では省略する。

但し、尾崎芳太郎著『是からの裁縫』における「経済服」の再現に取り組む背景については、第一報を要約・一部引用する形で触れておきたい。

二、「経済服」の再現に取り組む背景

こうした研究に取り組む背景には、尾崎芳太郎の夫人に服装改善運動について聞き取り調査など協力を得たことが遠因としてある。夫人から、全国を回わり新たな時代に適合する簡易服である改良洋服の指導・普及に取り組むとともに、次々と新しい考案服を考え出したが、実際に製作するのではなく、机の上でいろいろと考え出し、『経済改善　是からの裁縫』に掲載した等、当時の状況を知ることが出来た。『経済改善　是からの裁縫』の執筆者は尾崎芳太郎・げん、と夫婦で連名執筆にしていることからも、夫人が改良服の考案・普及に果たした役割は大きいものと推測できる。こうした中での、夫人の発言は信憑性の高い言葉であると捉えた。

『経済改善　是からの裁縫』に掲載される約百種近い考案服の多くは、実作されることなく、尾崎芳太郎の頭の中で描いた和服から洋服への道のりを示したものであると思われる。愛知県幡豆の横須賀裁縫学校の設立者であった和裁教授者の尾崎が、近代的衣服の考案を委託され普及運動に取り組むのは、かなり困難を極めたことが予想される。当時は、明治末頃から渡邊辰五郎のように、洋裁を学ぶために留学する者も現れる。洋裁を習得した者は、日本に洋裁技術を広めるとともに、洋服の仕立てに取り組む。こうした中で、尾崎芳太郎が和裁指導者であったからこそ、和服（着物）を基にした簡易洋服への移行という独自な発想が生まれたものと思われる。

『経済改善　是からの裁縫』に掲載される数々の考案服の再現に取り

組むことは、当時の和裁教育者が考え出した、平面構成である和服文化から立体構成である洋服文化への発想の転換の過程を、形として明らかにすることができる。尾崎氏が独自に提唱した、「経済服」から「改良洋服」、さらに「簡易洋服」への発展は、和裁士であったからこそ、生み出した発想であったと思われる。

本稿では、尾崎芳太郎が初期に考案した「経済服」の再現により、当時の和服から洋服への移行を試みた苦心と独自の発想の一端を見出すことができたので報告する。

三、尾崎芳太郎の考える服装改善と「経済服」

尾崎芳太郎は執筆した『経済改善　是からの裁縫』前篇・後篇において、尾崎が独自に考案した経済服などを提示している。既に述べたように、尾崎芳太郎は、大正期の生活改善運動の一環として取り組まれた服装改善運動において、日本服装改善会の裁縫指導者として服装改善運動を推進し、また和裁教育の立場から飛行式裁縫術と名づけた和裁の早縫い法を開発するなど、衣服形態の考案と技術開発の両面から、衣生活の改革に取り組んだ裁縫教育者である。

尾崎芳太郎が服装改善に取り組んだ背景については、『経済改善　是からの裁縫』前篇の前文に記載されるが、そこには尾崎の日本の衣生活に対する危惧と動機が記されている。

この前文で、尾崎が「これからの日本服」として求める衣服は、働く婦人を想定した衣服であり、「おそらく世界中で和服ほど働くに不便な服装はありますまい」とし、「どうしても『働きよいやうに』と改良するのが日本服装改善の第一歩である」と提唱している。

大正期に入り社会で働く婦人が出現し、こうした近代社会を象徴する婦人のための衣服を生み出すことが生活改善運動の一歩となる、という考え方が尾崎芳太郎の考案服の根底にはあると思われる。

一方で、服装改善運動が急務として取り組まれた背景には、働く婦人の為の衣服の考案のみでなく、経済的な背景も存在していた。

『経済改善　是からの裁縫』前篇の前文にも、経済的な背景が記されている。ここで尾崎が指摘しているのは、日本と西洋の布地の違いであり、日本の用布の無駄を指摘している。尾崎は「吾々の被服の原料となる綿花や羊毛は、我が國では殆ど産出きません」とし、国内生産のみで被服の原料が確保できないことを危惧し、さらに「和服は洋服の三倍の布を使つて居ります」と用布の節約を主張している。日本の和服は反物三十六㎝幅の細幅織物文化とでもいえる独自の衣文化を形成しているのであるが、それが衣服の近代化の障害になっていると捉えている。さらに、和服ほどに無駄重りの多い仕立方ではない」とし、衣文化の近代化の為には、伝統的な着物の縫製方法から見直す必要があることを示唆している。こうした取り組みの背景には、単に経済の効率化を目指すのみでなく、「日本国民の被服主要原料を欧米に仰いで、如斯世界第一等の贅沢服、無駄服を纏ふて悠々たるものは、果して自覚ある國民と謂へるでありませうか」とする、欧米諸国に対する、当時の日本国民の意識も根底には存在していたものと思われる。

さて、具体的には、服装改善にどのように取り組むことができるのか。尾崎は前文で示した「改善の七要素」でふれている。

尾崎が求める新しい日本服は、従来の和服文化からの脱却であったが、「長い間の習慣と、趣味嗜好とを破ることは容易なことではありません」と記しているように、文化的伝統と慣習を変えることの難しさは認識していた。その結果、独自に生み出した考え方が「『眼なじみ』と申しまして、なにより見慣れさせる事が大切」とする考え方である。具体的には「『服装の改善は先づ内容から改めて次に外形も』と進まねばなりませぬ」とし、和服らしい外形を保ちながら、用布の節約及び縫製方法の合理化を徐々に導入していくことを考え出したのである。

尾崎が考え出した『眼なじみ』とは何か、具体的には「経済服」「改良服」「洋服」の三段階の考案服の普及法である。より具体的にみると、第

一段階は「普通服から経済服」、第二段階「経済服から改良服」、第三段階は「改良服から洋服」とする普及方法を考え出したのである。

尾崎の想定する「経済服」は、「外形はもとのまゝで、用布の無駄を省くやうに、従来の普通服の裁方を改め働きよいやうに、縫方も亦改められたもの」（文中表現のママ）である。次いで「改良服」は「洋装と和装との二種」存在するとし、「改良和装の方は、例の『改善の七要素』を具備へて居るとは申されません」とし、洋装の方は「日本服改善の到達點に近い」としている。但し尾崎自身も「改良洋装は普通洋服の裁縫心得がないと、仕立ができませぬ」為、普通洋裁を取り上げているが、「普通洋服が、改善の理想服ではありません」と述べている。その考え方の根底には、「洋服は欧米人に適するのでありますから、其のまゝを採用しては、我が國の風土、骨格、人情などに適しません。之を適するやうに考へたのが、改良洋服です」とする考え方である。この「改良洋服」は、「普通洋服の心得があれば苦もなく直ぐに仕立られます」とし、現時点では「改良洋服が日本服装改善の到達點」との考えを示している。

さらに、尾崎は改良服の第一段階である「経済服」の特色について「普通服と経済服」の項で示している。

尾崎の考える「経済服の特色」として、次の十項目が挙げられている。

①「普通服より四分の一から五分の一の節布」では、着物に比べると「四分の一から五分の一の用布が節約」可能とし、着物の「普通仕立で一枚の本裁が四十圓かゝるものですと、此経済服に致しますれば、三十圓から三十二三圓位で出来上る」として経済面での節約に繋がることを強調している。

②「仕直しも普通服のやうに出来る」では、「仕直しが度度出来るといふ事は、和服では最も肝心な事」として、着物の特徴である布を再生し何度も活用する衣文化は経済面でも継承すべきとの考えを示している。

③「縫ひ上りが早い」では、「鋏を入れるところが、少ないのですから縫目が少ない」とし、構成を工夫することで「普通仕立にかかる時間の凡そ三分の一から二分の一位で出来上ります」と効率性を高める裁断法を強調している。

④「残りの布は小供服」では、「普通服（普通仕立）に要るだけの布で経済服を拵へますと、本裁では並幅の七八尺位は餘ります」として、この余り布から出来上がる子供服についても考案している。

⑤「古い普通服から仕直すにも便利」では、着物の「前身や衽も役に立たなくなった」部分を省いても新たな発想で経済服の製作が可能であることを示している。

⑥「裁方はごく手軽」では、「和服従来の裁方はなかゝ複雑」とし、経済服の特色は、和服の基本的な裁断法をより「簡単に手軽に改善」することであることを示している。

⑦「並幅物は九寸五分以上」では、広幅織物を活用する傾向を戒め、「並幅は九寸五分以上、二尺幅物は凡そ一尺八九寸もあれば充分普通身幅に出来ます」として、経済服は広幅織物を用いなくても製作できることを強調している。

⑧「地伸法は布幅を伸ばし地質を固める」では、日本の伝統的な地直しの利点も取り入れ、「布幅を伸ばし、地質を固め、縫物の場面をよくし、褪色を防ぎ、艶を出すなどの特色があります」と評価し、「新らしい木綿物には是非施していただきたい」と、経済服にも活用することを推奨している。

⑨「経済服の主眼點は帯がくれの縫目」とし、着物の帯がくれ部分（おはしょり）を布の縫い合わせ部分などに活用することにより「随分面白い考案」が生まれるとしている。

⑩「スラリとした型に出来上る」では、経済服では立体構成の発想を取り入れるため、「腰がピッタリと締り、裾開きがよく」と活動的衣服に変化することを強調している。

興味深いのは、こうした「経済服」の特色十項目の最後の項に「ご注意」として「裁方図だけを見てすぐに早合點をして、失敗したお方が随

分とありましたから、特に箆付と縫方にも御注意を掃って頂きたい」と記され、誌上講習による裁縫の普及の難しさも指摘している。

本報告では、前掲の十項目の特色が挙げられ「経済服」の誌上で紹介された作品の再現を試みる。

四、経済服「三分の二で出来る四ツ身と三ツ身（四ツ身）」

（一）経済服の中裁の特徴

大人用の着物である本裁を大裁、子供用着物である四ツ身や三ツ身のことを中裁、さらに小さな子供用着物である一ツ身を小裁と称している。

中裁の特徴としては、次の二点があげられる。

・普通仕立てに使う布の、凡そ三分の二でできあがる。

・仕直しも普通服と同じにできる。

ここで示す考案服の用布が、三分の二とは、普通仕立てに使う布を基準としている。仕直しも普通服と同様にできるとし、改良を加えたことにより不便になるわけではない。普通服と同じように着用できる点が、特色としている。

ここでは、「三分の二で出来る四ツ身と三ツ身　四ツ身」の裁ち方・裁ち図、型紙の作成について述べる。箆付については、資料1・2に示す掲載内容に基づき再現する。

① 裁ち方

普通身幅裁の裁ち図は、袖と身頃が続きになっており、衽がないのが特徴である。また、衿の隣に、残りの部分があるのもこの裁ち図の特徴である。廣身幅物は衿が一続きになっておらず、三つに別れている。身頃の裁ち方が、同じ向きになっているので片面ものではできないようになっている。しかし、本研究では、表裏が分かりやすいよう片面ものを使用することとする。

② 型紙

それぞれ裁ち図に従い尺寸定規で測定し、模造紙で型紙をつくる。図1・写真1は普通身幅裁、図2・写真2は廣身幅物の型紙である。

写真3は普通身幅裁の衿、写真4は普通身幅裁の身頃・袖の部分で、左が完成後着用者から見て左側、右が完成後着用者から見て右側になるものである。写真5は廣身幅物の左側は衿、右側は身頃である。写真6の左は袖、右は衽である。

③ 箆付

標準寸法に従い、箆付をする。（資料3参照）

（二）縫製方法の特徴

縫製手順は、普通身幅裁と廣身幅物に分けて、縫製手順と方法について述べる。四ツ身は、①袖、②身頃、③袖付、④仕上げという順序で製作する。

① 普通身幅裁の縫製方法

普通身幅裁の縫製手順と方法について述べる。

袖

外表にして袖下を袋縫いにする。織りは手前におる。（写真7）

身頃

前布の裁目に巻縫をする。（写真8）

背縫い外表に重ねて縫い、袋縫いにする。（写真9）

首肩まわりを切り開く。両側に八cm程、後ろに二cm程なだらかに切り開く。（写真10）

褄下を絎ける。箆に注意してつける。（写真11）

裾絎けをする。三ツ折絎をする。（写真12）

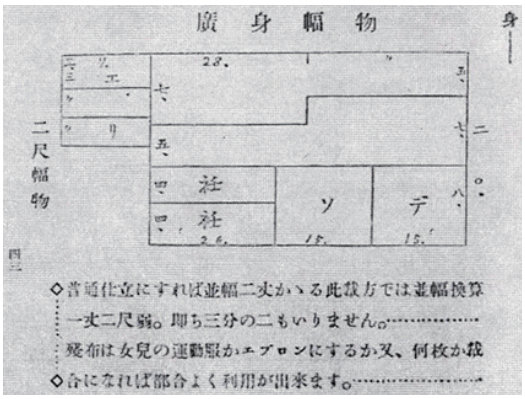
前身の開いている部分を縫う（帯がくれの縫目）。中表にして慎重に縫う。（写真13）

衿の長さが足りないので、衿先に緑色の別布を付け足す。四寸七分×六寸の布を両方の衿の続きに縫いつける。（写真14）

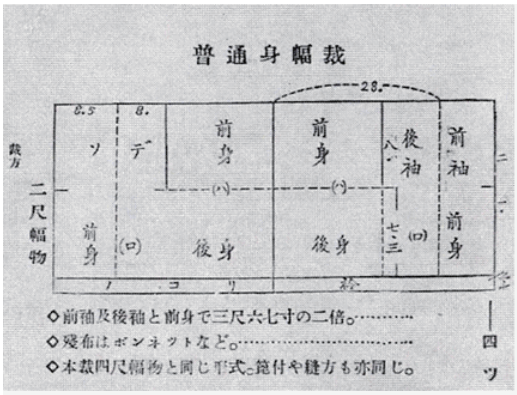
衿附箆を合わせて、裏表にして身頃を挟んで待針をうち、注意してこ

れらをつける。次に表衿幅をきめ、裏衿の接ぎ目のところで細く絎け、衿先の処理をする。（写真15）

写真16は完成した普通身幅裁である。



資料１　廣身幅物の裁図　掲載内容



資料２　普通身幅の裁図　掲載内容

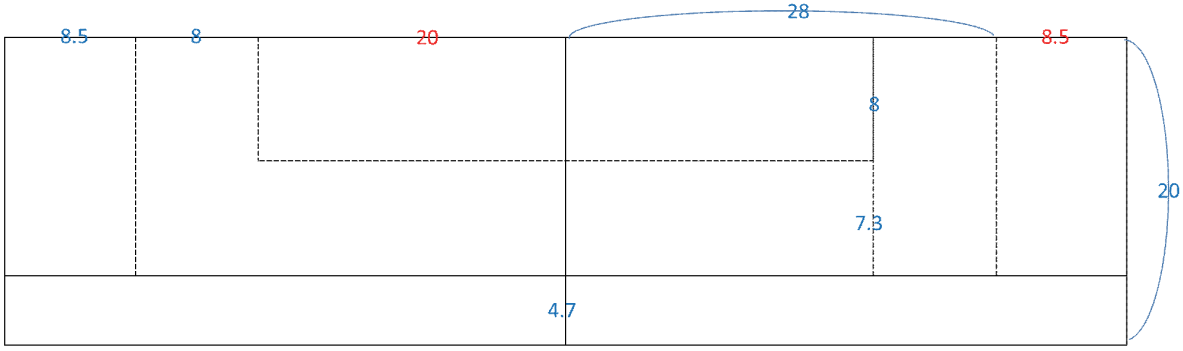


図１　普通身幅裁の裁図

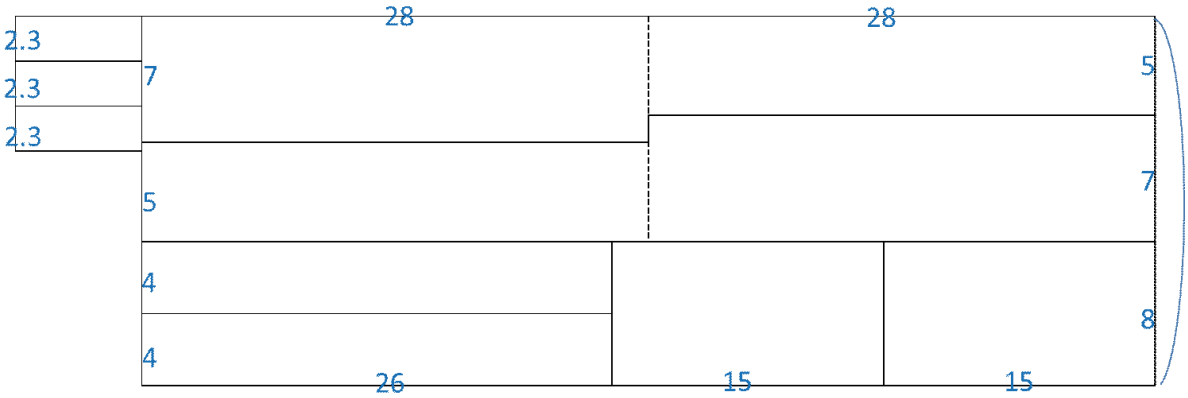


図２　廣身幅物の裁図

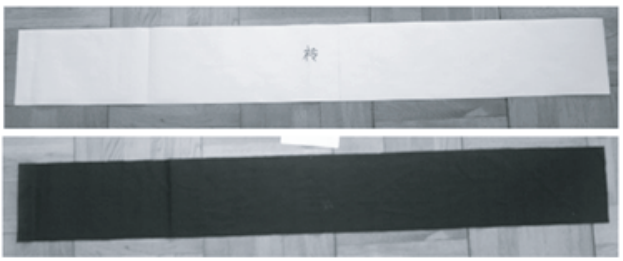


写真３　普通身幅裁の衿の裁断
上：型紙・下：裁断後

写真１　普通身幅裁の型紙

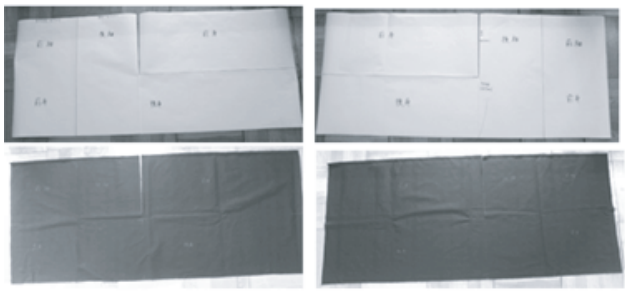


写真４　普通身幅裁の身頃・袖の裁断
上：型紙・下：裁断後

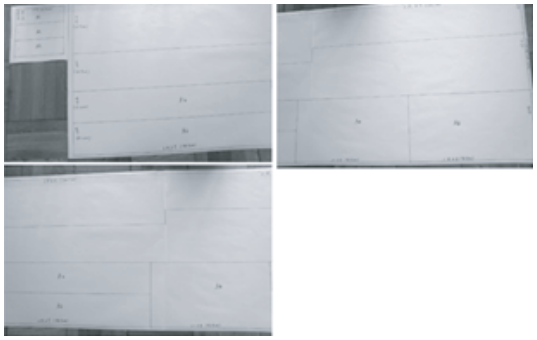


写真２　廣身幅物の型紙

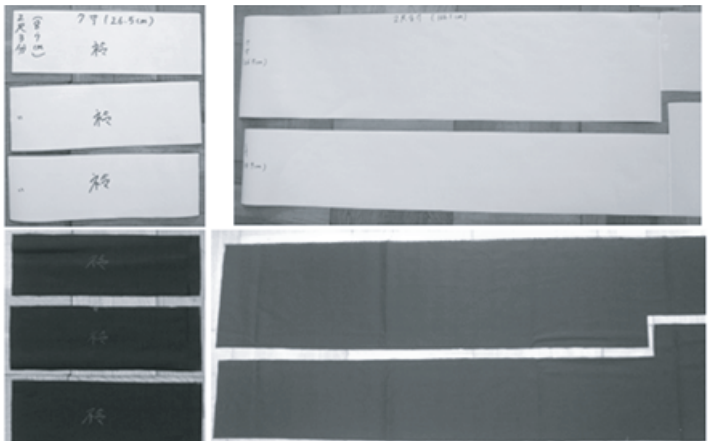


写真５　廣身幅物の衿と身頃の裁断
上：型紙　下：布の裁断

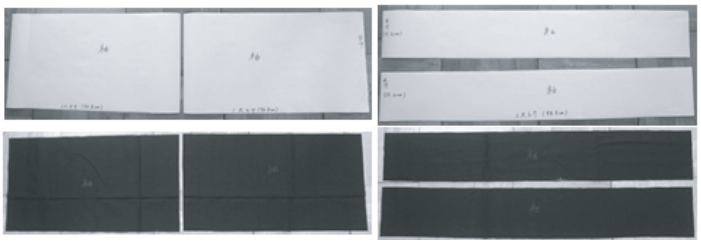
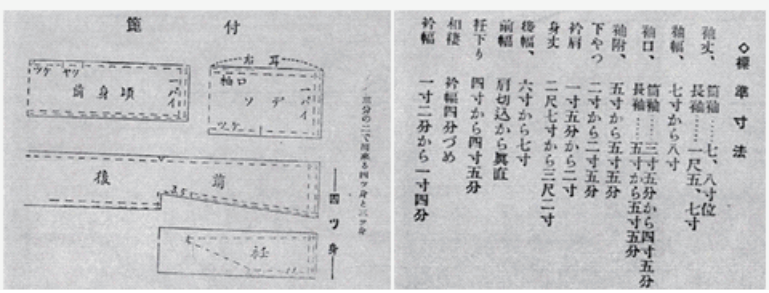


写真６　廣身幅物の袖（左）と衽（右）の裁断　上：型紙　下：布の裁断



◇標準寸法

袖丈、筒袖……七、八寸位
長袖……一尺五、七寸
袖幅、七寸から八寸
袖口、筒袖……三寸五分から四寸五分
長袖……五寸から五寸五分
袖附、五寸から五寸五分
下やつ、二寸から二寸五分
衿肩、一寸五分から二寸
身丈、二尺七寸から三尺二寸
機幅、六寸から七寸
前幅、肩切込から真直
衽下り、四寸から四寸五分
相撲、衿幅四分づめ
衿幅、一寸二分から一寸四分

資料３　標準寸法と篦付の方法

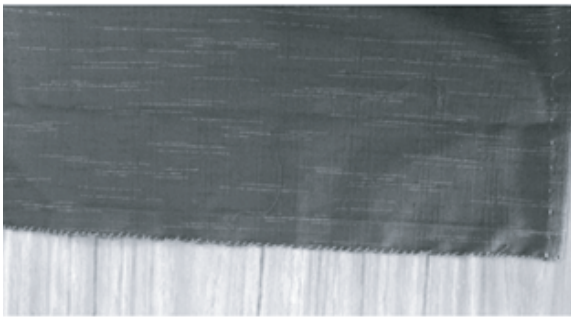


写真８普通身幅裁　前布の裁目に巻縫

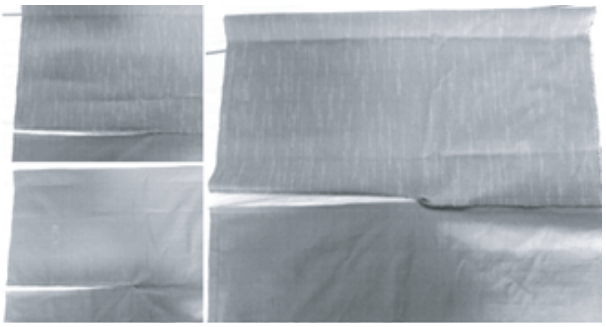


写真７　普通身幅裁　袖下を袋縫い

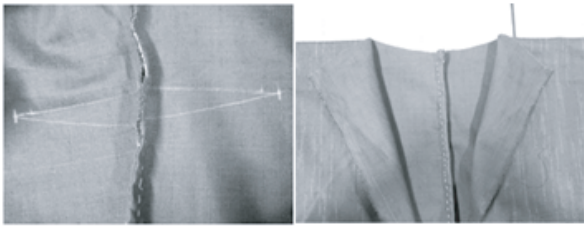


写真10　普通身幅裁　首肩まわりを切り開く

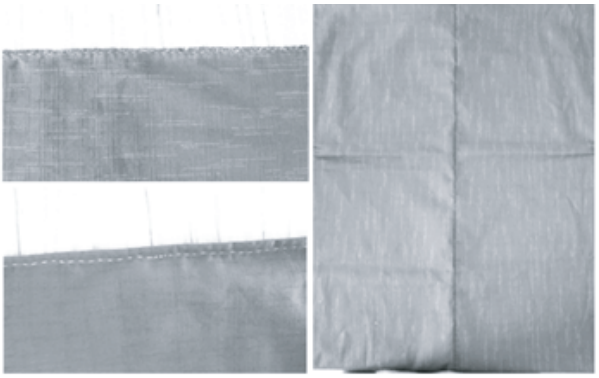


写真９　普通身幅裁　背縫いを袋縫い

写真12　裾を三ツ折紵にする

写真11　裾下を紵ける

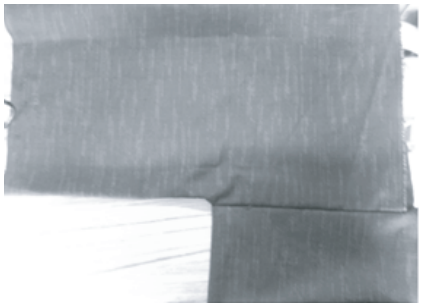


写真13　前身の帯がくれ部分を縫う

写真15　衿附箆を合わせて、裏表にして身頃を挟んで紵ける

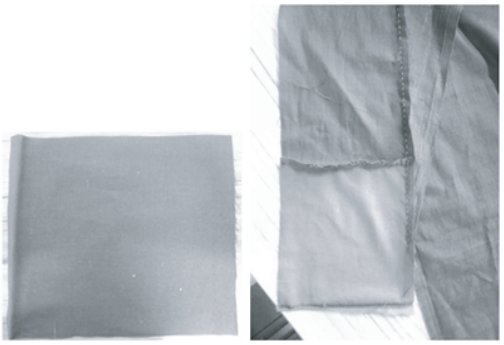


写真14　衿布不足の為、衿先に別布を付ける

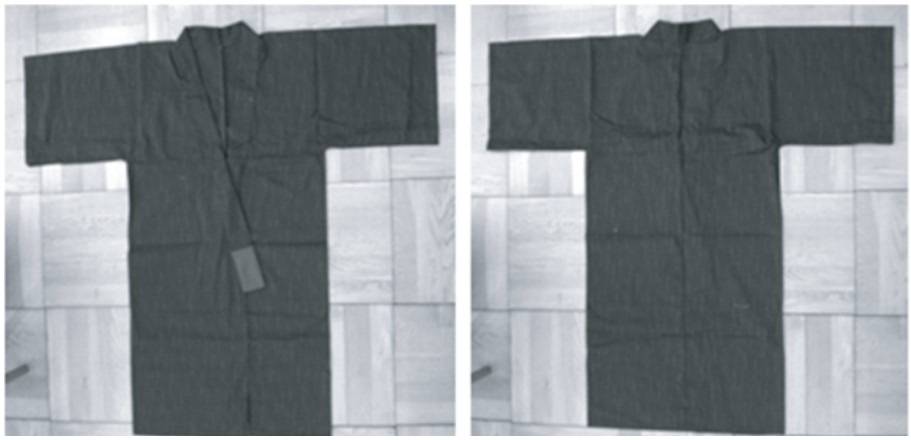


写真16　普通身幅裁の完成　前：左　後：右

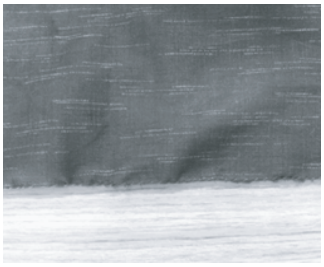


写真18　前布の裁目に巻縫い

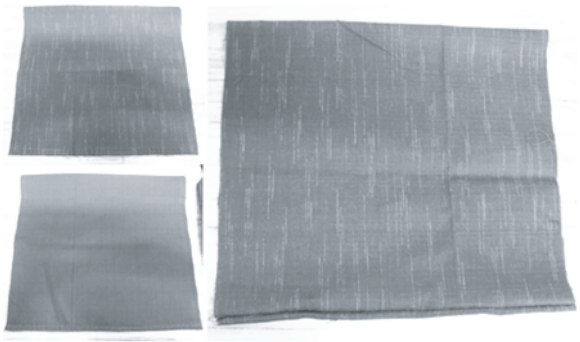


写真17　廣身幅物の袖下を袋縫い

②　廣身幅物の縫製方法

廣身幅物の縫製手順と方法を示す。

袖

普通幅物裁と同様、外表にして袖下を袋縫いにする。織りは手前にある。（写真17）

身頃

普通幅物裁と同じように、前布の裁目に巻縫をする。（写真18）

普通幅物裁と同じように、背縫い外表に重ねて縫い、袋縫いにする。（写真19）

脇縫は、中表に重ね箆を合わせて縫う。真直ぐに縫うよう注意する。（写真20）

前身と衽を中表に合わせて、箆通りに縫う。（写真21）

衿の長さ、幅が足りないので、衿に布を付け足す。衿幅として、これに二尺一寸×一寸四分と、両側に一尺三寸×三、七寸を縫い付け足す。（写真22）

褄下を絎ける。箆に注意する。（写真23①）

裾絎けをする。三ツ折絎けにする。（写真23②）

衿附箆を合わせて、裏表にして身頃を挟んで待針をうち、注意してこれらをつける。

表衿幅をきめ、裏衿の接ぎ目のところで細く絎ける。衿先を仕上げる。（写真24）

袖付

身頃の袖附の裏を出し、袖は表を出したままま内から外へ中表に箆を合わせて針を打って縫いつける。ずれないように注意して縫いつける。（写真25）

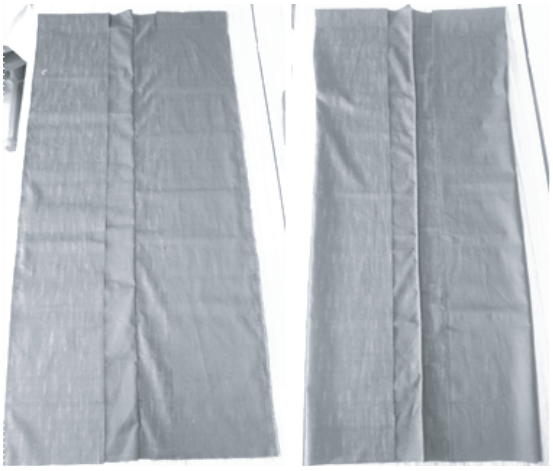


写真20　脇縫：中表に重ね箆を合わせて縫う

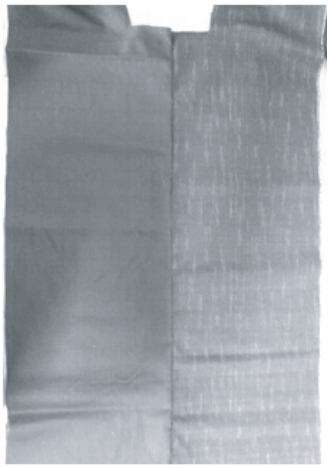


写真19　背縫い外表に重ねて縫い、袋縫にする

写真22　衿布が不足のため衿布を付け足す

写真21　前身と衽を縫う

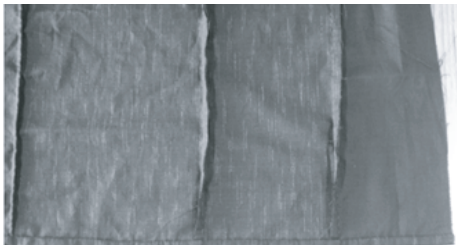


写真23②　裾を紆ける

写真24　裏衿の接ぎ目のところで細く紆ける

写真23①　身頃の褄下を紆ける

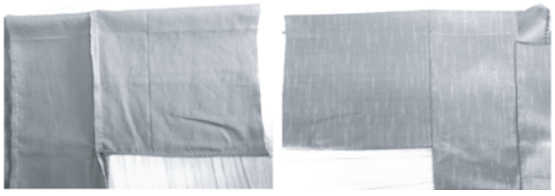


写真25　袖付けを縫う

写真26は、完成した廣身幅物である。

次に、「三分の二で出来る四ツ身と三ツ身　四ツ身」の普通身幅裁の特徴と用布について述べる。

（三）形態面の特徴と用布

① 普通身幅裁

特徴

縫製手順に記載されてなかったが、前身の開いている部分（帯がくれの縫目）を縫う。掲載される裁ち図では、首が出せない状態であったので、首肩回りを切り開くことを追加した。標準寸法より衿の長さが足りないので衿先を付け足した。また、衽がなく、脇縫いや袖付けがないことから、用布が少なく、裁ち方も簡単で、縫い上がりが早くなるようにできているといえる。さらに、経済服の特徴である帯がくれの縫目がある。

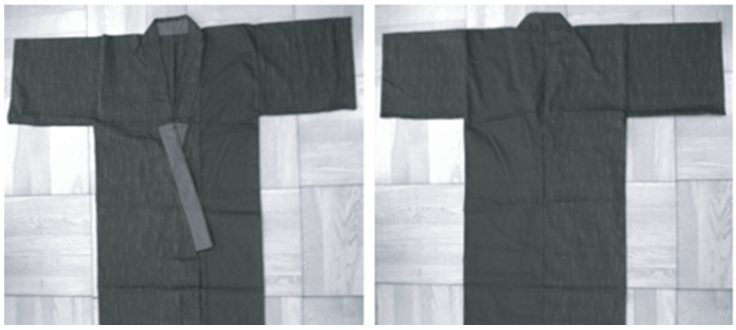


写真26　廣身幅物の完成　前：左　後：右

用布

使用した布は、裁ち図より、二尺（75.8㎝）×七尺三寸（314.4㎝）＝23831.52㎡に、両端の衿として付け加えた別布、四寸七分（17.8㎝）×六寸（22.7㎝）×二＝808.12㎡を加えて、24639.64㎡である。四つ身の四～五歳用は、並幅で572㎝＝20592㎡必要なので、これと比べると4047.64㎡多い布必要である。六～七歳用二尺幅物で300㎝＝22740㎡必要であり、18899.64㎡多い。八～九歳用は並幅で739㎝＝26604㎡必要で、1964.36少ない布でできる。四～五歳用だと約1.2倍となり、六～七歳用だと約1.1倍、普通よりやや多い布が必要である。しかし、八～九歳用だと、0.9倍となり、普通よりもやや少ない布で製作できる。（注　数式は横書きで示すこととする）

② 廣身幅物

特徴

標準寸法より、衿の幅と長さが足りないので付け足した。裁ち図の特徴として片面布ではできないものになっている。普通身幅裁に比べ、鋏の入れる場所が多いため縫目も多く時間もかかり、普通服に近い形である。

用布

使用した布は、裁ち図より、二尺（75.8㎝）×五尺六寸（212.1㎝）＝16077.18㎡と衿六寸九分（26.1㎝）×七寸（26.5㎝）＝691.65㎡に、衿として付け加えた別布、{1尺三寸（49.2㎝）×三.七寸（14㎝）×2＝1377.6㎡}＋{二尺一寸（79.5㎝）×一寸四分（5.3㎝）＝421.35㎡}＝1798.95㎡を加えて、18567.78㎡である。四つ身の四～五歳用は、並幅で572㎝＝20592㎡必要なので、これと比べると2024.22㎡少ない布でできる。六～七歳用二尺幅物で300㎝＝22740㎡必要であり、4172.22㎡少ない。八～九歳用は並幅で739㎝＝26604㎡必要で、8036.22少ない布でできる。四～五歳用だと約0.9倍となり、六～七歳用だと約0.8倍、八～九歳用だと、約0.7倍となり、普通よりも少ない布で製作できる。（注　数式は横書きで示すこととする）

着装

写真27は、普通身幅裁を着装したものである。着丈が一般の着物よりも短く、幅広の筒袖に近い形態が特徴である。写真28は、廣身幅物の着装である。外観は普通身幅裁と同様であるが、普通身幅裁よりも用布が

少ない為、袖幅も若干狭くなる。

おわりに

本報告では、前報の継続として、尾崎芳太郎が考案した経済服「三分の二で出来る四ツ身と三ツ身（四ツ身）」について、前報と同様の手法で再現を試み、尾崎の考案する経済服の特徴、つまり日本の和服の用布の節約、さらに和服から日本独自服への転換についての発想の一端を明らかにした。特に、本報告では、従来の反物の細幅織物ではなく、大正期に洋服生地として採用された広幅織物を用いることにより、布幅の制限が無くなり、それが着物の構成にも影響し、「袖と身頃を続けて裁断する」など従来の和服の発想では考えられない自由な発想で和洋折衷の新衣服が成立する過程を明らかにしたい。

継続して尾崎芳太郎の考案服の再現を行うことにより、日本に衣文化における和服から洋服に転換する過程を明らかにしていきたい。

■参考文献

尾崎芳太郎著『是からの裁縫　前編』大正10年
池部芳子、川村キミ子、佐野恂子、柴田志げゑ、田尻寧子、永井房子著『改訂新版　新和服裁縫（全）』昭和49年

写真27　普通身幅裁の着装

写真28　廣身幅物の着装